

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年 小説の部 最優秀賞

「俺たちSZNH団」

東明小学校五年

前川 まえかわ

葵 あおい

「拾っても拾っても、何で次の日にはゴミだらけなのよ。」

「かつ、紙がない。誰か助けて!」

遠くから人々の声が聞こえる。今回も作戦は成功。これは俺たち SZNH団、自然破壊 (SZeN HakaI) を目的とした団体のミッシェンの結果なのだ。

俺は SZNH団のリーダー、ザック。地下帝国に住んでいるんだ。俺たちの地下帝国は、昔自然豊かだった。だけど、一九四五年八月のある日、突然地球人達の戦争というものに巻き込まれて、自然を全て破壊された。そして現在もスタボロのままだ。だから、俺たちはやり返しに来たんだ。

俺の仲間を紹介する。男の子が俺とガイルとアクヤ。女の子はヤミとヤガネとネクラだ。俺たち六人で、これまでに色々な自然破壊をしてきた。例えば、ゴミをポイ捨てしたり、トイレットペーパーを無駄遣いしたり。今回も六人で一致団結して自然を破壊しに行こうと思う。

世界中のいろいろなところを調査した結果、次のターゲットが決まった。それは石川県白山市。何を隠そう、去年にユネスコ世界ジオパークに認定されたほどの豊かな自然が残っている。ああ、うらやましい。

そして、いよいよ俺たちは白山市にやってきた。目の前には山、後ろにも山、右にも左にも山。ここは白峰地区というところらしい。早速俺たちは今回の作戦会議をはじめた。

「それでは会議をはじめろ。みんな、今回はどんな自然破壊をしようか」

俺はメンバーに聞いた。

「また、トイレットペーパーの無駄遣いでどうかな。」

いたずら好きのヤミが言うと、頭脳担当のガイルがメガネをクイッと上げながら言った。

「ぼくは、いつもよりもっと大きなことをやりたいですね。」

「確かに!」

みんながうなずく。

「じゃあどうする?」

大きいことと聞いて、俺は自信満々に提案した。

「電気を付けっぱなしにしたらどうかな。」

するとガイルが俺の言い終わる前に言った。

「それじゃまだ小さいですよ。」

「じゃあ、どうする?」

みんな悩んでだまってしまった。

しばらくして、大食い担当のアクヤが目の前の畑を見つめて、

「なんておいしそうなたマト。大きくて真っ赤で」

とつぶやいた。するとひらめき担当のヤガネが、

「畑に火をつければ良いんじゃない?」

と言った。

「いいねえ。」

みんなの声がそろった。作戦は決まった。

買い物担当のネクラがすぐに必要なものを注文し、翌日配送なので明日の夜に作戦決行になった。

次の日の夜、あたりはいいんと静まり返っている。空には満天の星。時々ひんやりとした気持ちのいい風がふいてくる。

いよいよ畑に火をつける。俺の「せえの」の合図で全員同時にマッチをこする。しかし、誰も上手く火をつけることができなかった。

「あれ??」

何人かが言う。

「ネクラさん、説明書はありますか？」

ガイルが聞いた。

「あるけど、どうしよう。暗くて見えないわ。」

「ネクラ、携帯電話持つてるじゃん。それで照らせば？」

ヤガネが言う。

「ごめん、今日忘れて来ちゃって。」

ネクラがそう言った瞬間

「コラァ!! 誰だね、わたしの野菜をぬすもうとしているのは。」

と、鼓膜が破れそうなくらいの大声が耳に届いた。みんなが一斉に声のする方を振り返ると、そこには強そうなおばあさんが立っていた。俺は、おばあさんに向かっておそるおそる

「いえ、我々は決しておばあさんの野菜を盗もうとしたわけではありません。この畑に火……」

と言った瞬間、ヤミが俺のおしりをギュッとつねった。

「うっ。」

痛みでしゃべることができなくなった俺の横でヤミが言った。

「おばあさん、ごめんなさい。こんなにきれいでおいしそうな野菜は初めて見たもので、つい食べたくなってしまっ……」

するとさっきまで鬼のようだったおばあさんの顔が、少し優しくなった。

「どろぼうは本当によくないけど、そんなに野菜を食べたいのなら、私の家に来なさい。」

と言って、おばあさんは俺たちを家に招待してくれた。おばあさんの名前は雪子さんというそうで、近くで一人暮らしをしているそうだ。

家に着くと、雪子さんはテキパキと料理をはじめた。ミヤとヤガネとネクラも手伝って、台所からはとても楽しそうな声が聞こえてきた。

四人が作ったお手製の夏野菜カレーを食べる。

「いただきます。」

一口食べると、アクヤとガイルが大声で

「うんめー!」

と叫んだ。ヤミとヤガネとネクラも、

「おいしいね!」

と、話しながら食べた。俺も、おいしすぎて、十回もおかわりしてしまった。お腹がパンパンになって、すぐに眠くなってしまった。その日は雪子さんがそのまま家に泊めてくれた。ちよつとレトロな布団は、重みがあつて気持ち良かった。

日差しが顔にあたって目が覚めた。家中に雪子さんのお経がひびきわたる。しばらくすると、お経が話し声に変わった。トイレに行こうとして仏間の前を通ったときに、俺は聞いてしまった。

「ごめんね、おばあちゃん。あの時おばあちゃんからもらったネックレスを落としちゃって。」

俺はその話が気になって、トイレに行くのも忘れて雪子さんに話しかけた。

「雪子さん、おはようございます。そのネックレスのこと、もっと聞いてもいいですか。」

と言うと、雪子さんは、少し悩んでから口を開いた。

それはこんな内容だった。雪子さんは昔白峰村の桑島という地区に住んでいたそうだ。そこは、昭和五十五年の三月に完成した手取川ダムを建設するときに、水の中に沈んでしまった場所らしい。

雪子さんが桑島から出て行くちようどその時、雪子さんは亡くなったおばあちゃんにもらった大切な形見のネックレスを、家の前の溝に落としてしまったそうだ。取りたかったけど、狭くて深い溝で、手が届かなくてあきらめたらしい。

俺はこのことをすぐに仲間達に伝えた。俺たちは、最初は雪子さんのことが怖いと思っていただけ、雪子さんにたくさんお世話になって、たくさん優しくしてもらったから、その時には雪子さんのことが大好きになっていた。

「何十年も経っているのに、まだ忘れられないんだな。」
「アクヤがつぶやいた。」

「それだけ大切なものだったんだね。」

「ヤミがひざを抱えて言った。するとヤガネがひらめいた。」

「みんなでそのネックレスを探しに行くのはどうかな。」

「いいねえ。」

全員の思いが一つになった。「雪子さんに恩返しをしたい。」こうして、僕たちはネックレスを探しに行くことにした。

手取川ダムに着いた。木がおい茂った美しい緑色の下、土の茶色の部分の大きさが、ダムの貯水量の多さを教えてくれる。鳥とセミの聲がまじって、夏の日差しに水面がキラキラ輝いている。

ガイルがあつという間に桑島地区の場所を調べ、そして当時の地図を手に入れてくれた。潜水服も水中メガネも空気ボンベも準備ばんだん。

早速、俺たちはダムの中に飛び込んだ。ダムの下らへんに着いた時、家はもうどこにもなかった。きつと腐って水に流されたのだろう。俺は、ちよつとだけ戦争に巻き込まれた時のことを思い出してしまった。思い出の場所は、原子爆弾でぐちゃぐちゃにされて、たくさんの人が家や家族、そして命を失った。ここに住んでいた人たちも、思い出の場所はダムのせいでぐちゃぐちゃになってしまったんだから、本当に悲しかったんだろうなと思うと、胸が苦しくなってしまう。

しばらく探し続けていたら、アクヤが光輝く物を見つけた。みんなを呼んでいろいろな方法を試して、俺たちは溝からネックレスを取り

出すことに成功した。

「やったね！流されていなくてよかったね。」

「ヤミが笑顔で言った。」

「本当ですね、無事に見つかってよかった。」

いつもは落ち着いているガイルも興奮している。

でも、サファイヤの高そうなネックレス。そのネックレスの金属部分は、水のせいでひどくさびていた。

少しでも早く雪子さんに返したいと思った。でも、俺はあの時話をしていた雪子さんがちよつぱり泣きそうな声だったのを思い出して、足を止めた。

「このネックレス、少しでもきれいにできないかな。」

俺は先を行くみんなの背中に聞いた。みんなは一斉に振り向いて考えしてくれた。

そしてネクラが携帯電話で調べて言った。

「サビ落としっていうものがあるらしいよ。」

今回は注文して届くのを待ってられない。だからすぐにホームセンターに行つて、サビ落としを買った。サビ落としを使って拭いていたら、ネックレスがキラキラと輝き出して、その大きな光は俺たちを包み込んだ。俺は、あまりのまぶしさで目をつぶった。

しばらくして、目をあけた時にはなぜか雪子さんの家の中だった。

「あれっ、なぜだ？そついえばネックレスはどこだ？」

探そうとしたけど、ネックレスは俺の手の中にあった。俺たちは雪子さんのいる畑に向かって走った。

「雪子さん」

まだまだ遠くに見える雪子さんの名前を、みんなで大声で呼びながら走った。

雪子さんの側に着く頃にはみんなへとへとで、アクヤは倒れ込んで

しまっている。そんなことは気にもとめず、俺は雪子さんにおばあちゃんの形見のネックレスを渡した。すると雪子さんは、受け取ったネックレスにほおずりしながら、何度も、

「ありがとうね。」

と言って、俺たち六人に囲まれながらしばらく泣いていた。

俺たちには、地球の自然を破壊するというミッションがある。でも、俺たちは誰かの役に立って喜ばれることの嬉しさを知ってしまった。

数か月後

「それでは会議をはじめます。みんな、今回はどんな人助けをしようか。」

